

名古屋大学 大学院情報学 研究科長 殿
To: Dean of Graduate School of Informatics, Nagoya University

研究報告書

RESEARCH REPORT

滞在期間における研究報告書を、添付のとおり提出いたします。
This is the cover page of my attached research report.

A. Cover Page

1. 被招へい研究者 所属・職・氏名 Affiliation (Country / Area), Position, Name of Visitor The University of Melbourne(Australia/Victoria), Li Yang
2. 受入研究者 所属・職・氏名 Affiliation, Position, Name of Host 名古屋大学情報学研究科, 准教授, 石井敬子
3. 滞在中の研究テーマ Research Theme during the Visit Intergroup emotion between Japan and China
4. 滞在期間 Period of Visit <u>2020年3月1日 ~ 2021年2月28日</u> From (Year/Month/Day) To (Year/Month/Day)
5. 招へい教員の主な研究テーマ Main Research Themes of the Visitor Cooperation behavior, Altruism, Trust, Cultural comparison
6. 招へい教員の個人ページなどへのリンク Link (URL) to the Personal (or Project) Page of the Visitor https://www.researchgate.net/profile/Yang-Li-208

(注) 「研究報告書」には、被招へい研究者の研究活動や講義等の写真を添付してください。なお、「研究報告書」(セクションA, B, C)及び写真は Web サイト等で公開される場合があります。個々の写真の公開を拒否される場合は、その旨記載して下さい。

Please select pictures which were taken when the visitor conducted his/her research or provided a lecture, and attach it to in this report. We may later upload the reports (sections A, B, and C) and/or pictures on our Web site. If the visitor does not want to have the picture(s) posted on our Web site, please indicate so per picture.

B. Research Activities (to be published at the Faculty Web Site)

1. 滞在中の共同研究テーマや(可能なら)成果の紹介

Brief Introduction of the Joint Research and Result (if possible) during the Visit

今回の滞在期間中は、新型コロナウイルスの流行およびそれに伴う非常事態宣言などがあったため、研究活動は主にリモート方式で行わざるを得ない状態にあった。具体的には、Zoomなどによるオンラインの研究打ち合わせを行ったり、オンライン調査などの非対面形式で研究データを収集したり、学会参加などもオンライン学会の形式をとった。このような事態の中ではあるが、いくつかの共同研究を実施することができた。

以下では、研究実施順にそれらを報告する。

- (1) 新型コロナウイルス流行下における、人々の利他傾向・心理的状态の日中米比較調査。

研究目的：

コロナ禍は世界各国の人々の生活に大きな影響をもたらした。その中での人々の心理的・行動的变化は多くの研究者の関心を呼んだ。特に、外集団に対する態度に変化があるように見受けられる。例えば日本では、「コロナ警察」と言われるような、地域コミュニティ外からくる人や車に対して嫌がらせをする言動が報道された。同様に、アメリカとカナダの国境付近でもアメリカナンバープレートの車に対する攻撃的言動があった。さらに、アメリカではアジア人をターゲットとして差別的行動が多数報道されていた。しかし一方では、医療関係者やロックダウン中に生活的苦境に立たされている老人に対するボランティア活動や寄付活動も多く報道されていた。コロナ禍における人々の他者に対する態度や行動傾向、特に利他行動や信頼傾向に着目し、日中米で比較研究を実施した。

研究方法：

本研究は、Qualtricsオンライン調査プラットフォームを用いたオンライン調査形式で、日中米の大学生を対象に実施された。調査データの回収に当たってはマカオ大学のDr. Nan ZhuとUniversity of RochesterのProf. Judith Smetanaの協力を得た。実施期間は2020年4月下旬～5月初頭だった。

調査には以下の項目が含まれる：

- ・さまざまな対象への利他行動意図：回答者は以下の対象それぞれを相手にした場合、金銭的分配場面及びアルコール消毒液分配場面において、どれくらい相手に分け与えるかを回答した。対象には、家族/知り合い/見知らぬ自国民/見知らぬ外国人/新型コロナウイルスの感染の疑いがある人が含まれていた。
- ・さまざまな対象への信頼傾向：回答者は以下の対象それぞれに対する信頼の程度を4点尺度で回答した（1＝全く信頼しない～4＝非常に信頼している）。対象には、家族/近所の人/知り合い/初めて会う人/異なる宗教を信じる人/異なる種族・民族の人/外国人/新型コロナウイルス感染の疑いがある人/医療関係者/地域の人/マスコミ関係者/政府の官僚/科学者・専門家が含まれていた。
- ・一般的信頼（Yamagishi et al., 2015）尺度と社会的用心（Yamagishi & Yamagishi, 1994）尺度：回答者は一般的に人々が信頼できると思う程度を

問う9項目と、社会の中他者に用心する程度を問う5項目に対して、7点尺度（1=全くそう思わない～7=非常にそう思う）で回答した。

- ・リスク回避傾向：回答者は、50%の確率で当たりが出るクジにおいて、当たりで得る金額とハズレで失う金額を操作した10個の項目において、くじ引きに参加する傾向を回答した。その回答を基にリスク回避傾向が算出される。この尺度は先行研究では日中米の文化差がないことが報告されている(Wang et al., 2017)ため、個人レベルのリスク選好を統制するために含まれた。

研究結果：

・利他性に関しする文化共通な反応：

いずれの国においても、家族→知り合い→見知らぬ人の順に、対象と自分の関係が遠くなるにつれ、利他的に振る舞う程度は減少する傾向があった。しかし、見知らぬ相手に関しては、自国民であれ外国人であれ、その扱いは変わりなかった。また、以上の傾向は金銭的報酬であっても、アルコール消毒液のようなコロナ禍の中で重要とされている物資であっても同様に見られた。同時に、新型コロナウイルスに感染した疑いがある対象（以下「疑似感染者」と略す）に対する利他行動は、ただの見知らぬ相手よりも高かった。いずれの国でも、少なくとも知り合い程度の利他性が示されており、場合によっては（アメリカ・消毒液条件）、家族と同じくらいに多くの資源が渡されることが明らかになった。

・利他性に関する文化差：

金銭的資源分配の場面では、家族に対する利他性は米中の方が日本よりやや高く、逆に見知らぬ他者に対する利他性は米中が日本より著しく低いことが見られた。言い換えれば、日本人参加者は相手によって分配の仕方を変える程度が少なかった。消毒液分配場面では、日中の反応は全体的に金銭的資源と同じような行動傾向が見られた。一方、米国参加者は消毒液分配における利他性は、家族以外の対象に対して全体的に底上げされる傾向が見られた。なお、家族の場合はいずれの国でも平均して70%ほどが相手に渡されているので、天井効果によって文化差が見られていないことが考えられる。

・対象ごとの信頼に関する文化共通な反応：

利他性と同じように、関係性が遠くなるにつれ相手への信頼が低下する傾向は、いずれの国でも見られた。また、初対面の人への信頼は外集団（外国人、異なる宗教／民族の人）への信頼より高くなることはなかった。一方、疑似感染者への信頼は高くなく、他の外集団と同程度にとどまった。その他の相手に関しては、医療従事者や専門家は信頼されている一方、マスメディアと政府への信頼はさほど高くないこと傾向も見られた。

・対象ごとの信頼に関する文化差：

家族以外の対象に関しては、日本の信頼は概ねアメリカより低かった。中国の信頼は両者の間に位置することがほとんどであったが、初対面の人への信頼ではアメリカと同等の高さ、マスメディア・政府への信頼においては日米を上回る信頼を示した。

・一般的信頼と社会的用心に関する文化差：

一般的信頼では中米が同程度に高く、日本が低い結果が見られた。一般的信頼をさらに下位概念である信頼性への信念（他者がどれくらい信頼に値するかに対する見積もり）と信頼への選好（裏切られる可能性があっても信じる方を選びたい）を分けて検討すると、上述の文化差は信頼性への信念のみ見られることがわかった。社会的用心に関しては、今回では文化差が確認されなかった。

さらに回帰分析を行なった結果、一般的信頼の文化差は個人の利他性、リ

スク選好、性別、社会的用心などの要因を統制した場合でも確認された。そのため、一般的信頼の日中米の文化差への説明はこれら以外の要因を検討する必要があることが示された。

・疑似感染者への利他性に関して：

上述の結果では、人々はコロナウイルス疑似感染者に対して特に信頼することはないが利他的に振る舞う傾向があることがあり、その傾向性は特にアメリカで顕著に見られることがわかった。回帰分析では、個人のリスク選好、一般的信頼、一般的な利他性（見知らぬ人への分配）、性別を統制しても、文化差が見られることが明らかになった。

考察：

本研究はコロナ禍初期においての日中米の人々の利他性や信頼を中心に調査を行なった。その結果、いずれの国でも一部の報道で見られるような外集団への不信や差別的な扱いは特に見られなかった。また、疑似感染者に対しては、いずれの国でも、比較的によく多くの資源が分け与えられるという傾向が見られ、それが米国においては特に顕著にあった。そのほかに関しては、関係の遠近によって利他傾向や信頼が変化することや、一般的信頼の日米差・日中差などといった過去の研究と一貫する結果が見られた。一方、利他性に関して日本が平均主義的な分配傾向を示すなど、先行研究ではあまり報告されていない現象が見られた。また、一般的信頼の日中米文化差に対してリスク選好や利他性以外の原因を追求する必要があることも示され、今後の研究の方向性が示された。

(2) 内集団・外集団に対する態度・感情と個人特性の関連性に関する研究

研究目的：

集団間葛藤研究の文脈では、外国人などの外集団に対する差別行動や攻撃行動が行動者の個人特性との関連性が調べられてきた。中では社会的支配志向性(SDO: Social Dominance Orientation)や右翼権威主義傾向(RWA: Right-wing Authoritarianism)は特に関連性が高いとされてきた。近年では、外集団が内集団にもたらしうる脅威にはいくつかの種類があり、それらに対応する適応行動もそれぞれ違うことが指摘されている(Cottrell & Neuberg, 2005)。別の文脈として協力行動の研究でも、これまで内集団ひいきとしてまとめられている内外集団に差をつける現象は、内集団により多く資源を渡すような「ingroup love」と、外集団の資源を奪ったり攻撃したりするような「outgroup hate」は区別されるべきであり、その背後にある心理メカニズムもそれぞれ異なることが議論されている。本研究では外集団(外国人)に対する態度を攻撃・回避・援助の3タイプに区別した上で、それらの態度と個人が感じる外集団からの脅威の関連性、そしてSDOやRWAをはじめとする個人特性の関連を検討する。

研究方法：

本研究は、Qualtricsオンライン調査プラットフォームを用いたオンライン調査形式で行われた。研究は2回に渡って行われた。1回目は名古屋大学の大学生200名を対象に、2020年10月～11月に実施された。2回目は日本のクラウドソーシングサービスに登録されている一般人200名を対象に、2021年2月に実施された。本研究は広島修道大学横田晋大教授も共同研究者として参加している。

調査には以下の項目が含まれる：

- ・内集団（日本人）と外集団（外国人）への態度を測定する尺度（攻撃/回避/援助それぞれ2項目）を4点尺度（1=全くそう思わない～4=非常にそう思う）で測定した。
- ・外国人に感じる脅威に関して、5種類（病気/価値観/社会機能/資源/安全）それぞれ1項目6点尺度（1=全くそう思わない～6=非常にそう思う）で測定した。
- ・以上の項目における「外国人」に関して、回答者が思い浮かべていた具体的なイメージ（人種、性別、年齢層など）についてたずねた。
- ・社会的支配志向性SDOを16項目の6点尺度（1=非常に当てはまらない～6=非常に当てはまる）で測定した。
- ・右翼権威主義傾向尺度RWAを、第1回調査では4項目の短縮版、第2回調査では30項目で測定した。
- ・個人の病気などに対する抵抗力の弱さに関して、感染脆弱性尺度PVD（15項目7点尺度（1=全く当てはまらない～7=非常に当てはまる））で測定した。
- ・個人の利他傾向に関して、家族・知り合い・知らない人それぞれに対する利他傾向を測定できる対象別利他主義尺度（21項目4点尺度（1=したことがない～4=ほとんどいつもそうする））で測定した。
- ・さらに第2回調査では個人のレイシズム系構成を測定するレイシズム尺度（17項目9点尺度）、日本人と外国人それぞれに対する攻撃傾向を測定する直接的・間接的攻撃性尺度短縮版（7項目ずつ4点尺度）も含まれていた。

現段階の研究結果：

本研究のデータは現在も解析中であるため、ここでは現時点で得られた結果に関して報告する。

・第1回調査に関して：

回避的態度尺度においては、回避行動を引き起こすと予測される感染脆弱性PVDと正相関していた。援助的態度尺度は、見知らぬ人への行動においてのみ、利他性尺度との正相関が見られた。この二点は、回避的態度と援助的態度の測定の構成概念妥当性が確認されたことを示している。ただし、この回の調査では攻撃的態度の妥当性を検討できる尺度が含まれていなかった問題があった、この点は第2回調査で追加の検討を行う。

そして、SDOおよびRWAと回避・攻撃・援助態度との関連を検討した結果、RWAでは、先行研究と一貫して、回避的態度およびPVDとの正相関が見られた。しかし、SDOおよびRWAと攻撃的態度は、予測と反して、負の相関関係および無相関であった。これは、日本人相手ではSDOおよびRWAが高いほど攻撃的な差別をすることがなく、見知らぬ人相手に対する差別は、SDOやRWAの影響力はないことを示している。以上の結果は、RWAは予測と一貫して回避的態度の規定因となっている可能性があるが、SDOは予測とは異なる方向で差別行動に影響していることを示している。また、援助的態度は、SDOとRWAの両方で負相関であったが、RWAの相関係数の方が高かった。援助をするには対象に接近する必要があることを踏まえると、RWAが外集団を回避する行動の規定因であることが示されたと言える。

・第2回調査に関して：

SDOとRWAは両方とも全般的な人種差別主義とは関連するが、行動レベルでの多様性を組み込むと、RWAが回避的態度を引き起こす可能性のみが見られ、SDOはこれらの差別的態度と関連しなかった。このことは、SDOが差別・偏見の規定因であるとの主張に対して一石を投じるものであり、SDOが必ずしも差別行動全般に対して影響するわけではないことを示している。SDOが関連した

のは、家族に対する利他行動であり、攻撃的差別や攻撃行動など、競争的な行動や行動傾向とは関連しなかった。

(3) 信頼行動の文化差に関する研究

研究目的：

信頼、特に見知らぬ他者に対する一般的信頼は、血縁を超えた大規模な人類社会にとって重要な潤滑油になる。これまでの文化比較研究では一貫して日米間には一般的信頼の文化差があることが示されており、その背後には安定した集団構造をベースとした日本型の集団主義社会と、個人や流動的な自由市場をベースとしたアメリカ型の個人主義社会との間の違いが存在することが指摘されている（例：Yamagishi, 2011）。一方では、同じ東アジア文化圏にある中国に関しては、大規模社会調査や行動実験のいずれにおいても高い信頼が報告されており、信頼の日中差が確認されている。しかしこの現象に対する説明は十分に行われているとは言えない。報告者が過去に行った研究では、積極的に他者に信頼（好意）を伝えることは、日本よりも中国において重要であることが示唆されていた。つまり、過去の研究に見られる中国の高信頼は、測定方法である信頼ゲームの信頼行動に「相手に対して好意を示す」動機が含まれてために観察された可能性がある。そのため、本研究では信頼を示すことができる場合の信頼行動とそれができない場合の信頼行動を比較することによって、相手に好意を示す動機によって日中米の間に信頼差が説明される程度を検討する。

研究方法：

本研究は、オンライン調査プラットフォームを用いたオンライン仮想実験の形式で行われた。対象者は日中米のクラウドソーシングサービス登録者の一般人各400名である。本研究は高知工科大学三船恒裕准教授も共同研究者として参加した。

実験は信頼行動研究において多用されている実験経済学ゲームである信頼ゲームと分配委任ゲームを用いて行われた。信頼ゲームと分配委任ゲームのいずれも、参加者は他者に裏切られる可能性がある状態で相手に自分の報酬金額を決定させるように身を委ねるかどうかを決定する。相手が利他的に振舞ってくれば、身を委ねる（信頼する）方がそうしないよりも多くの報酬がもらえるが、相手が利己的に行動した場合では信頼すると大きく損することになる。二つのゲームの違いは、信頼ゲームでは、参加者が相手を信頼すると決定した場合、その決定は相手に伝えられ、その上で相手は自分の行動を決定する。それに対して分配委任ゲームでは、相手は参加者の決定について何も知らされないどころか、参加者に決定権があったことすら知らない状態で、ただ利他的に行動するかどうかを決定する。そのため、信頼ゲームにおいては、信頼行動は相手に好意を伝える効果を持つが、分配委任ゲームではそれはない。本研究では、各参加者が信頼ゲームと分配委任ゲームの両方を行う参加者内デザインが用いられた（順番はランダム化している）。また、参加者はゲームの説明を受けた後、自分が実際にそのゲームに参加することを想像した上で自分の行動を決定する、つまり仮想実験の形式で意思決定を行なった。

2つのゲームでの信頼行動や返報行動（上述の説明での「相手」の立場になった場合の行動）を決定した後、参加者は一連の事後質問にも回答した。その中には、参加者がゲームで意思決定をした際の動機などに関する質問や、参加者個人の一般的信頼を測定する一般的信頼尺度、参加者の利他傾向を測定する社会価値志向性尺度SV0などが含まれていた。

現段階の研究結果：

本研究のデータは現在も解析中であるため、ここでは現時点で得られた結果に関して報告する。

信頼行動は全体的に米>中>日の傾向が見られた。この文化差は信頼ゲームと分配委任ゲームのいずれにおいても同じような傾向性が見られた。しかし一方、信頼ゲームは全体的に分配委任ゲームよりも信頼行動が高く示されていたが、その違いに文化差は見られなかった。つまり、好意を伝える動機はどの文化においても同じくらいの働きを持つことが示された。これは予測に反する結果であった。

一般的信頼尺度や、他者に好意を示すことの重要性に関する信念に関しては、いずれも米・中が同じくらい高く、日本が他の2国より低い結果が得られた。回帰分析の結果では、一般的信頼・好意を示すことの重要性・個人の利他性を統制した場合には、米国が日中よりも信頼が高い効果が残っていたが、その他の文化差の効果は無くなることがわかった。現在では日中差に焦点を当てた詳細な分析が実施されている。

(4) その他の共同研究：

・意思決定のパターンと向社会性の関連性に関する実験研究

この研究は人々の向社会性の心理メカニズムを探究するため、情報が不完全な状況においての人々の意思決定スタイルと個人の向社会性、さらに情動・感情表出との関連性を調査する研究計画の一環である。本研究はその第1段階として、心理学実験に特化されたプログラミング言語PsychoPyを用いてオンライン意思決定実験をデザインし、日本の大学生260名ほどを対象に実施した。参加者は提示された刺激画像に対して意思決定（左または右キーを選択）、一連の刺激－決定の組み合わせに応じて報酬を得るという試行を200試行連続で実施した。その後、事後質問項目として向社会性などを測定する心理尺度にも回答した。

参加者は試行を重ねる刺激－決定－報酬の関連性を探索し学習し報酬獲得の効率性を上げることができる。その際の学習と探索の仕方は、直近の報酬に反応するモデルフリータイプと、一定の予見性を持って戦略的に探索を行うモデルベースタイプに区別される。本研究は個々の参加者が示した学習と探索のタイプと、それぞれの人の向社会性との間の関連性を検討する。研究は2020年12月～2021年2月に実施された。

現在はデータ整理中でのため、結果を報告できる段階ではない。本研究は玉川大学坂上雅道教授、青山学院大学清成透子教授、西南学院大学松本良恵助教との共同研究である。

・新型コロナウイルス流行下における人々の行動と行動免疫システム理論に関する多国間比較

この研究は感染症の脅威と人々の行動、特にない外集団を差別化し外集団との接触を減らすことによって、感染症が内集団で広がるリスクを減らすことを主張する、行動免疫システム理論に着目した研究である。研究は日本、アメリカ、イタリア、中国において実施された。調査は各国のクラウドソーシングサービス登録者の一般人を対象に、オンライン調査の形式で行われた。

現在ではデータ整理中でのため、結果を報告できる段階ではない。本研究は大阪大学三浦麻子教授、慶應義塾大学平石界准教授、広島修道大学中西大輔教授との共同研究である。

- ・コロナ禍におけるワクチン摂取意向や非合理的購買行動とリスク認知の関連性

この研究はコロナ禍においての人々の現実的な行動と、その背後にあるリスク認知の関連性に着目した一連研究である。コロナ禍の中ではさまざまな非合理的行動が見られていた。例えば初期の頃では買いだめ行動によってマスク・アルコール消毒液をはじめ、トイレトペーパーなど感染症対策とは無関係のものまでが売り切れる問題が発生した。その後もいわゆる空間除菌グッズなどといった科学的に有効性が示されていない商品が流行したり、次亜塩素酸の不適切な使用による健康被害が生じたりする問題が相次ぎ発生している。また、新型コロナウイルス用のワクチンの健康被害が誇張されたり、それに対する摂取意欲が低迷したりする現象も見られた。これらはいずれも未知の感染症というリスクに直面した時の反応として見ることができ、それには人々のリスク認知が深く関与していると考えられる。報告者はこれらの現象に対して、クラウドソーシングサービスに登録されている一般人を対象にオンライン調査を数回にわたって行った。

現在ではデータ整理中でのため、結果を報告できる段階ではない。本研究は東海学院大学工藤大介講師との共同研究である。

2. 滞在中に訪問した研究者

Researcher(s) Visited during the Stay

新型コロナウイルスの流行及び緊急事態宣言などにより、滞在中の移動及び他者との対面交流は必要最小限とした。そのため、名古屋大学所属の先生方の他では、実際に対面で交流できた研究者は大阪大学高橋英之特任准教授；高知工科大学の西條辰義特任教授、三船恒裕准教授、仁科国之助教、中分遥助教、井上裕香子助教；東海学院大学工藤大介講師に限られている。

一方では、オンラインの形式で議論を交わしたり共同研究を実施したりした研究者は多数存在している。以下では日本国内に所属する研究者を一部リストアップする。

共同研究者：

広島修道大学 横田晋大教授；中西大輔教授；玉川大学 坂上雅道教授；青山学院大学 清成透子教授；西南学院大学 松本良恵助教大阪大学 三浦麻子教授；慶應義塾大学 平石界准教授；

Zoomなどで直接交流のあった研究者（一部）：

北海道大学 高橋伸幸教授；近畿大学 稲葉美里講師；東京大学 鳥山理恵研究員；大妻女子大学 宮崎美智子准教授；精華女子短期大学 村井千寿子講師；名古屋工業大学 小田亮教授

3. 滞在中に参加したワークショップなど

Workshop/Symposium/Conference Attended during the Visit

上述の通り、新型コロナウイルス感染拡大により、滞在中はオンライン形式でワークショップや学会などに参加した。

参加した学会：日本心理学会、日本社会心理学会、日本人間行動進化学会、Society for Personality and Social Psychology

シンポジウムやワークショップなど：The Vrije University Amsterdam主催のSeminar in honor of Ernst Fehr；University of Copenhagen 主催のAmsterdam-Copenhagen Cooperation Colloquiumシリーズなど

C. Life in Nagoya/Life in Japan (to be published at the Faculty Web Site)

観光/食/文化などなんでも。

名古屋あるいは日本に滞在して楽しかったことや印象に残ったことなど。

(Sightseeing, Food, Culture, etc. Please describe whatever you felt interesting or impressive during your stay in Nagoya and Japan.)

コロナ禍のため、滞在中はあまり外食したり観光したりすることができなかった。それでも日々の日常生活を通して、名古屋の生活を楽しむことができた。

「味の独立王国」とも称される名古屋の食文化には、もっと深く触れたいと思う一面もあったが、日々の些細な食体験や、たまたま立ち寄った小料理屋の味、そしてスーパーに立ち並ぶ赤味噌の品揃え、どれも「名古屋味」をほのかに漂わせていた。ただ、一年も経ったのに、赤味噌の味噌汁の作り方は少しも上達していないところを考えると、やはり「インプット」をもっと増やせばならないとも思ったりしている。他に特筆すべき点としては、今回の滞在中に「世界の山ちゃん」の手羽先を初めて食する機会があったが、そのポテンシャルの高さには感動している。味噌やだしなどの味は伝統的である一方、それに慣れ親しんでいない文化の人にとっては受け入れるまでに時間がかかる可能性がある。しかし山ちゃんの手羽先のようなスタイルの食べ物は、その手軽さと味わい深さの両立から、ファーストフード文化が盛んである欧米の食文化にとって非常に親しみやすいものになると予想できる。欧米では日本食といえば謎なロール寿司がメジャーになるのだが、ぜひとも「名古屋発ジャバニーズ手羽」に世界進出いただき、そのイメージを塗り替えて欲しいと願っている。

文化的な側面に関しては、最近自分は漆塗りや香道、伝統衣装などの伝統文化に興味を持ちはじめたこともあって、歴史的に共通のルーツを持ちながらもそれぞれ独自に進展を遂げた日本と中国の伝統文化を比較する楽しさを得ることができた。日本の無形文化財や人間国宝の認定制度は伝統文化の衰退を挽回するために重要な役割を果たしている。一方中国でも、無形文化財の制度が整えられてきたり、全国の博物館が連携して視聴者にわかりやすい形で文化財の紹介を行う番組を制作したりと、時代の流れに合わせた活動が見られるようになった。両国それぞれの努力を比較することで、より伝統文化が直面する現状と課題を知ることができた。

また、個人的には感染状況が厳しくない期間に着物の着付けの勉強を行ない、着物という伝統に含まれる文化的意義の理解を深めた。色や柄だけではなく、着物の生地や織り方や染め方などといった、実物に触れなくてはなかなか体感できない側面にも触れることができ、着物文化の奥深さをより一層知ることができた。また、これまでは着物の「きっちりさ」、つまり着付けの仕方も場面と服装や小物の対応のルールもはっきりとした決まりがあるような感覚をメインに持っていたが、実は「遊び感」や楽しさを重んじる一面もあることについても知ることができた。それによって着物に関する印象は平面的なものからより立体的な印象に変わることができた。伝統を重んじる日本の着物文化と、中国の若者の間で流行する「現代風」漢服文化を比較することは、文化・伝統・時代・流行・推移などのことについて考えるきっかけにもなっている。滞在中では実現できなかったが、状況が許すようになったら、積極的に着物で外出したいとも考えている。

D. Research Activities (confidential - not to be published at the Faculty Web site, optional)

研究活動に関してはBの部分を参照。非公開希望の内容は特にない。

Yang Li の画面を表示しています オプションを表示



The image shows a Zoom meeting window. On the left, a slide features a cartoon character with a yellow helmet and a red and white circular logo on its chest. The character's mouth is open, and the Japanese text "ぼくは、みんなを信じてる。" is written inside. On the right, a video thumbnail shows a woman with glasses, identified as Yang Li. The main content area displays the title "Trust among Japan, China and the US" and the name "Yang Li". The Zoom interface includes a top status bar with the text "Yang Li の画面を表示しています" and "オプションを表示", and a bottom toolbar with icons for mute, video, chat, and other controls.

Trust among Japan, China and the US

Yang Li

ぼくは、みんなを信じてる。